

ボルノーというドイツの教育学者がドイツ語の「経験」erfahren と「体験」erleben の違いは大事だ、er は～からを fahren は「旅」を Leben は「生活」を意味し、日常を離れて旅をして学ぶのが「経験」、日常生活から学ぶのが「体験」だと言っています。聖書の中の偉大な人物はみんな旅をしました。アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセもヨシュアも旅をして神様が共におられるという確信を持ちました。しかし、その後、約束の大地に定住するようになった人々は神様の恵みも力も分からなくなって信仰を捨てます。定住生活になると偶像崇拜を始め神様は人々を強制的にアッシリアやバビロニアに奴隷として旅に出されます。

日本でも多くの人が旅を通して今日まで人々に影響力のある言葉や絵を残しました。松尾芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」は最も有名です。芭蕉は1644年に伊賀上野で生まれ、1694年に大阪で死ぬまで51年の生涯を生きましたが晩年の10年は文字通り旅をすみかとする生活でした。「寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき」は旅を共にした弟子のことでしょうか、仏教の同行二人で阿弥陀も一緒に旅してくれていたという実感のことでしょうか。

民数記9章15～23節にはイスラエルの人々がエジプトを脱出した後、シナイ半島を旅している間、ずっと雲が幕屋を離れて登ると出発し、雲が離れないといつまでも留まったと書かれています。「幕屋」は神様を礼拝するテントで、この「幕屋」という単語はヘブライ語でミッシュカーンと言い、「住む」シャカーンが語源で、「隣人」を意味するシャケーンが生まれ、更にシェキナーという言葉が生まれました。それは、神の臨在とその民の親近性を表す言葉でユダヤ教の教えの中で最も重要な言葉です。神様を中心に旅する時に主なる神が自分たちと共にいてくださると実感し、隣人はシェキナーから生まれたシャケーン「隣人」だと言うようになると言うのです。

ラファエル著「災害の襲う時」に「海難事故や強制収容所などで生き残るために最も必要なのは愛着である」と書かれています。「あの人にもう一度会いたい」「あの仕事をやり遂げたい」という愛着があると苦しみに打ち勝つがその愛着がないと生きる力を失ってしまうとも書いています。つまり何に愛着を持つかで人生の在り方が変わります。家や地位や財産や物に愛着を感じる人は旅など出来ません。神と人に愛着をもって生きると人生はいつでもいい日旅立ちとなり留まる時ともなります。大事なものは、神様の臨在シェキナーに触れることです。私達の人生を導いて下さった雲の柱と火の柱を仰いで生きて行きましょう。